

2021年DX実践の年 時代に乗り遅れない、生産性を上げる、成長戦略を描く

自分達の手でつくるDX (Digital Manufacturing)

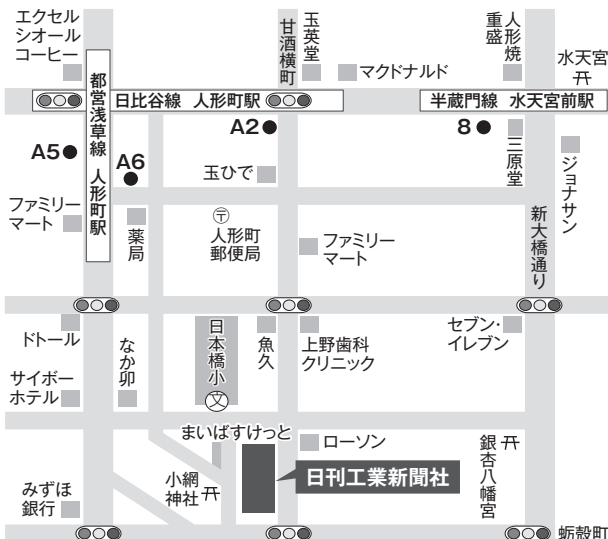
～「やってみたら意外と簡単でした」お客様の感想です～

日時 2021年 7月 7日(水) 10:00~17:00 (9:30 受付開始、休憩 12:30~13:30)

会場 日刊工業新聞社 東京本社 セミナールーム 東京都中央区日本橋小網町 14-1 (住生日本橋小網町ビル)

受講料 44,000円 (資料含む、消費税込) ※同時複数人数のお申し込みは2人目から39,600円
 ※追加申込の際は備考欄に「複数割引適用希望」とご記載ください。
 (記載が無い場合は通常料金のご請求となる場合がございます。予めご了承ください)

日刊工業新聞社セミナー会場案内図



【アクセス】東京メトロ 日比谷線 人形町駅(A2)出口より徒歩3分
 東京メトロ 半蔵門線 水天宮前駅(8番)出口より徒歩4分
 都営浅草線 人形町駅(A6)出口より徒歩3分

※会場には受講者用の駐車場がありません。必ず最寄りの公共交通機関でこ来場ください。

セミナー申込を検討中の皆さまへ

新型コロナウイルス感染症に伴うセミナー開催及び対応について、弊社WEBサイトにご確認ください。

<https://corp.nikkan.co.jp/seminars/view/3693>

受講にあたり

開催決定後、受講票並び請求書をご郵送いたします。
 申込者が最少催行人数に達していない講座の場合、開催を見送りとさせていただきます。(担当者より一週間前を目途にご連絡致します。)

お申し込み方法

ホームページ (<https://corp.nikkan.co.jp/seminars/search>) または、下記申込書をご記入のうえFAXにてお申し込みください。

受講料

セミナー開催日1週間前までに銀行振込にてお支払いください。
 振込手数料は貴社でご負担願います。

キャンセルポリシー

開催日1週間前までの受付とさせていただきます。1週間前までにご連絡がない場合はご欠席の方もキャンセル料として受講料全額を頂きます。

申込・問合せ 日刊工業新聞社 総合事業局 セミナー事業部
 TEL 03 (5644) 7222 FAX 03 (5644) 7215

受講申込書	7/7 DPP		お申し込みは <input type="text" value="日刊工業 セミナー"/>	<input type="button" value="Q"/>
	https://corp.nikkan.co.jp/seminars/search			
会社名	フリガナ		業種	
氏名	フリガナ	部署・役職	TEL	
所在地	〒		FAX	
備考			E-mail	※今後、E-mailによるご案内を希望しない方は <input type="checkbox"/> チェックをしてください。

個人情報の取り扱いについて

ご登録いただいた情報は日刊工業新聞社が細心の注意を払い、展示会・セミナー・サービス等、各種ご案内を送らせていただくことを目的に利用させていただきます。
 なお、宛先変更・配信停止をご希望の際は右記までご連絡ください。【ご連絡先】日刊工業サービスセンター 情報事業部 nkmail01@nikkansc.co.jp

開催主旨

2015年に始まったIoTブームは2016年にAIの登場によりトレンドとなり、2017年から2019年におけるテクノロジーの進化により身近なものになりました。そしてそれらのテクノロジーの総括としてDX (Digital Transformation) という言葉が創られ、2020年には多くの企業が自社のDXを紹介するに至りました。

講師は2015年からIoT、AIを開発・実践し続け、それらを2020年にDXという形で統合し、実際に複数のDXの構築にも携わり、それらの経験から5つの教訓を得ました。

1. DXの前に**業務改善**：業務の半分はムダ。必要な業務を標準化しそれをデジタル化する
2. **要件定義書**は自分で書く：自分の業務は自分でデジタル化する
3. システム**開発は自分で**行う：DXを構成する70%以上のシステムは自分達で開発可能
4. 外部に開発を委託する時には**プロジェクトマネジメント**を自分で行う
5. クラウドを活用する：コストミニマムで常に最新のシステムを維持する

この5つの教訓を手順化し、ユーザーが自らの手でシステムの企画、構築、運用するプログラム**DPP (Dx Promotion Program)**を開発しました。

DPPで実際にDXを構築したお客様が報告会では「はじめはDXという言葉すらわからず戸惑いましたが、実際にやってみると意外と簡単でした」という感想を頂きました。

何より大切なのは、**自分たちに必要なシステムを自分たちでつくること**。それにより**コストミニマムで将来の発展性もあるシステムが構築**できます。

本セミナーにより自社、自職場に必要なDXを自分自身の手で構築して下さい。

本セミナーの特徴

1. 実際のDXの57システムの要件定義書を紹介（展示）
2. 実際のDXの57システムの一部をデモンストレーション、体験（可能な場合）
3. AIの音声認識システムの体験

講師

株式会社ロンド・アプリウェアサービス

中崎 勝氏

【略歴】1981年、ブリヂストンに入社。設備設計と保全業務に従事。1987年に日本DECに移籍し、システム及びAIの開発に従事。1992年、ロンド・アプリウェアサービスを設立し、製造業を中心としたコンサルティングで多くの成果を上げる。不良ゼロを可能にする実践アプローチにもとづく指導方法に定評があり、国内メーカーに加え、海外メーカーなどでも大きな改善効果を上げている。また、技術セミナーも幅広く実施しており、具体的な要因分析にもとづき、かつ具体例を提示するプログラムで好評を得ている。

プログラム

1. 今の時代：なぜデジタル化 (DX) が必要か

- 1.1 デジタル化の流れ：DXの実現が企業の将来を決める
- 1.2 日本のデジタル化の遅れの実態

2. DXとは

- 2.1 言葉の整理：IoT、AI、DX、デジタル化、RPA… IT用語を整理・整頓する
- 2.2 DX (Digital Manufacturing) とは
- 2.3 5つのフェーズ：生産性を上げる2つの社内DX、競争・成長戦略3つの戦略DX
- 2.4 3つのシステム：DNA (Database、Network、Application) 単独→連結→統合
- 2.5 企画・構築・運用プログラムDPP：自分たちの手で企画、開発、運用する

3. DXの前に業務改善

- 3.1 業務の半分は不要
- 3.2 業務に潜む10大口ス
- 3.3 業務改善とは
- 3.4 業務改善の7ステップ
- 3.5 事例紹介

4. 要件定義書の書き方

- 4.1 要件定義書とは
- 4.2 要件定義書作成の流れ
- 4.3 定義すべき項目
- 4.4 事例紹介：DXを構成する57システムの要件定義書

5. 実際のシステム紹介

- 5.1 営業と開発をつなぐ1時間見積もりシステム
- 5.2 営業と生産をつなぐ需要予測システム
- 5.3 AIの自動検査
- 5.4 AIにより音声認識の活用：デモ

6. 自分たちの手で開発を行う

- 6.1 ノーコード・ローコード
- 6.2 開発の70%は自分達でできる
- 6.3 デジタル人材育成プログラム
- 6.4 自分たちの手でプロジェクトをマネジメントする
- 6.5 事例紹介：自分たちの手で作った自分の業務のデジタル化

7. 気になる課題

- 7.1 クラウド活用の必要性
- 7.2 セキュリティに関するミニ知識
- 7.3 アナログ改善⇄デジタル改善：従来の改善はデジタル化で精度とスピードを増す

*本プログラムは現段階のものです。

ITの技術革新は速いためプログラムは開催時期により最新のものに変わります。